

編集 樋口 みな子

E-mail  
minginga@agate.plala.  
or.jp

郵便振替  
「銀河通信」02740-7-  
56535

(6号分1,000円)



## グラヌールの夕べ

『チェーホフとの恋』出版記念会が開かれました。

なごり雪の3月25日、北海道文学館で「グラヌールの夕べ」が開かれ、70人の人たちが文学の香りを楽しみました。

グラヌールとはフランス語で「落穂をひろう人」という意味です。ことばと言葉とko-to-baの領域を経巡りしながら、私たちにとって、決定的に大切なものを探していきたいとの願いがこめられて、2月に創刊された季刊誌「グラヌール」(石塚出版局)と「チェーホフとの恋」の出版を祝って開かれました。

最初に、リディア・アヴィーロア著「チェーホフとの恋」小野俊一訳、ワルワラ・ブブノワ(挿絵)、小野有五(解説)によって53年ぶりの出版を祝って、父、小野俊一氏と妻であったアンナさん、アンナさんの姉であるブブノワさんについて、パワーポイントでたくさんの写真を使って3人の足跡を語りました。俊一氏はペトログラード大学に留学、コンサートで、アンナさんを見初め、シベリア鉄道で日本に帰国するのです。息子の俊太郎をヴィオリニスト



父小野俊一氏について語り、小野有五さん、1952年の名訳「チェーホフとの恋」が現代語で読まれました。工藤正廣さんの「冬のロマンス」の朗読が素晴らしく、意外な一面に秀加君の感動の拍手が...

トに育てようとしたアンナさん。ところが、医師の誤診で亡くなってしまいます。そのことも要因で離婚。その後、俊一氏は結婚し、有五さんが生まれました。日教組を作った人であったり、人民新聞を発刊したりと、さまざまな社会運動にも資財をつぎ込んだ人であったとのことのお話は興味深く、父の生き方そのままに、市民運動に情熱を注ぐ、有五さんは父の遺伝子を受け継いでいることに感銘を受けました。

チェーホフも医師であり、さまざまな文化活動をした人であったことに共通点が多かったことに気づきます。

後半は松信雅子さんの朗読で「チェーホフの恋」を聴きました。声で聴くと、リディアのチェーホフへの純粋な思いが伝わってきました。有名なチェーホフの「中二階のある家」工藤正廣訳を、山本治美さんが、ロシア語で朗読。ロシア文学の雰囲気伝えてくれました。



よびみらいロシア語で朗読する山本治美さんは読者であり、日本協会の方です。(北海道支社)

## 春よ早くきて

もう3月の末だといのに、春は足踏みしています。今も外は雪が降っています。3月は卒業式や運動会など別れの季節ですね。夫も5年ぶりに新しい学校へ異動になりました。私は2~3月と山で明けの5と山もやりますから、真夏に日焼けして山女!に変身しました。家族は、元気で。☺

## クオベツ山系最大の難所を踏査

CL6103長谷川雄助 SL13996三野裕輝 13442樋口みな子 サポート(車での送迎) 11883藤内英夫  
クオベツ山の最大のクライマックス、アプローチの林道を含めて18kmの分水嶺踏査を、2月26日(土)、27日(日)に行いました。

踏査登山を歓迎するような青空の中、穂別町R274ヒグラシの沢林道入り口で、サポートの藤内英夫さんに見送られ、出発。ラッセルを交互に繰り返しているうちに、ようやくザックが体になじんできました。4.5kmの林道を分水嶺目指して進みましたが、いつの間にか別の林道に入り込み、地図とGPSで確認しながら引き返しました。水の流れる沢のスノーブリッジを2つも越えるアルパイトでした。地図にない林道が縦横に走っています。

分水嶺到達は出発から、ほぼ3時間後の11時。小憩の後P405を過ぎ、やや平らな稜線を過ぎたところで見上げるような急斜面が現れました。このP553が最大の難所。三野さんが上手にジグを切ってトップを行き、続いて私。テントを背負った長谷川さんが後ろにつきます。

標高差は約130mですが、緊張感あふれる登りにザックの重さを忘れるほどでした。私は何度もトレースを踏み外して、ずるずると後退。「トレース通りに歩け」と長谷川さんから声が飛ぶ。急斜面でのスノーシューの歩き方やスキーのキックターンのような方向転換の要領など大事なことを教わりました。

予定より1時間遅れの17時20分、P558手前のコルにテントを設営。豚汁とささやかなお酒で1日の疲れを癒し、満天の星に自然の美しさを感じ、明日への鋭気をいただく。20時就寝。私は、冬のテント泊は初めての体験で寒さが心配でしたが、十分とはいえないまでも眠ることはできました。冬テンでは足を温かくしなくてはと反省しています。

27日、5時起床。天気は私たちに味方してくれました。ピリッと、寒さは厳しいけれど晴天。

7時半出発。コルからすぐにそびえ立つP588に取付きます。痩せ尾根の急斜面で一瞬ひるみましたが、慎重に歩を進めます。頂上直下の雪尻を切って、やっと乗り越えました。P640の斜面もそうですが、どの急斜面も雪崩の危険を感じながら登りました。長谷川さんが、安全なルートを確認しながら進んでいる途中で、私は呑気に「日高の山脈がきれいだね」と言って呆れられました。どっしりとした幌尻が印象的でした。

P611の肩を乗越した下降ルートは、ナイフリッジになっており、そこに鹿の足跡が点々と残っていました。よくぞナイフリッジを軽やか？に走れるものだと感心。私たちは恐る恐る進んだことはいまでもありません。次から次と現れる、急斜面や、ナイフリッジ。こんな厳しい登山は初めての体験でした。

チョボツナイ林道の終点、分水嶺離脱地点に出たところで、藤内さんに出迎え依頼の電話。14時半でした。ここで飲んだポタージュスープのおいしかったこと！体が温まり、気持ちリラックスできました。

これから9kmの水湯の沢林道を、体力と忍耐力で下るのです。ラッセルを交代しながら、1時間ご



とに軽い休憩をとり、ただひたすら歩いて林道始点・市道交差点に19時20分に到着しました。

274号線の街路灯のオレンジ色が見えた時の嬉しさは忘れられないです。藤内さんと感激の握手の場面を思い浮かべながら、思わずラッセルの足が早くなり、「みな子さん、そんなに早く歩いたらバテるよ」と言われるほど早く早くと気が急きました。藤内さんの送迎、ありがとうございました。

総歩行距離18km余り。分水嶺6km。スタミナを切らさずに歩き通せたことは、大きな自信になりました。1日たったところで、長大な距離を歩き通した感激がじんわりと押し寄せてきました。4人のチームワークが成功につながったのだと思います。

### ・・・穂別町長和北尾根

3月6日に、東オサワ信号所からの分水嶺踏査登山をしましたので報告します。

メンバー CL長谷川雄助 (6103) SL植田惇慈 (10384) 樋口みな子 (13442)

穂別ダムを超えてJRの東オサワ信号所の重機置き場に車を置き、長谷川さんと私はスノーシュー、植田さんは、山スキーの装備で、9時半に出発。風もなく穏やかな日差しで、もうそこまで春が来ているのを感じました。

今回は私がトップに行く。前回のラッセルであまり苦にならなくなったものの、雪が重たい。植田さんは急斜面も難なく登って行く。今では珍しいアザラシのシールがしっかりと雪をつかむようです。10時10分、1月に踏査した時の新妻支部長のルート旗を発見。早速、写真に収めました。鹿の足跡が点々とあり、鹿の姿も2度ほど見ましたから、ずいぶんたくさんいるようです。アカエゾマツの植林で、スキーではかなり技術が必要です。私たちも、スキーは用意して行きましたが木を上手に避けて登るのは大変だ

ったと思います。スノーシューで良かったです。

思いがけなくP500の分水嶺に11時丁度に到着。「P425のほうが高く見えるね」とGPSと地図で確認しました。ところがP425に向かって歩いているつもりが、ピークから派生する尾根が多くて逆の方向に歩いていたのです。GPSとコンパスで確認して、また引き返し、P415のコルでランチタイム。

いつも至福のランチで、時間をとり過ぎるので今回は30分以内でと考え、お湯は持参。コーンスープと、焼いたハムステーキが美味しかったです。

分水嶺上を歩いていると、なんと人の姿。鈴木美紀さんの赤いヤッケが目飛び込んできました。分水嶺をこうやって助け合っていないでいる実感がこみあげた瞬間でした。P477の分岐で鈴木定信さん、美紀さんご夫婦が待っていて下さったのでした。ルートのある山では味わえない感動がありました。よくぞ、地図と、GPSで、ほぼ同じ時間につくなんて、すごい！と思いました。

下山は4箇所のスノーブリッジを慎重にわたり、急斜面は、尻滑りしたりと、1時間半で到着しました。小川のせせらぎが気持ちよく、「春の小川はさらさら」とくちずさみたくなるような陽気で、分水嶺踏査を楽しんだ一日でした。

15時10分、駐車地点に到着。

今回初めて植田さんと分水嶺踏査と一緒にでき、ひとつひとつ人をつなぐことでもあるんだなあと思いました。

### ・・・清風山(穂別町・夕張市)

3月19日～21日テント泊をしながら清風山から東オサワまで縦走しましたので報告します。

CL鈴木貞信 SL長谷川雄助 植田惇慈 樋口みな子

3月19日、好天に恵まれ札幌を5時に出発。3台の車を穂別の東オサワ重機置き場と、穂別トンネル工事現場に置き、ニニウパンケ橋ゲート前から9時に出発。3日間で林道を含めて約22キロメートルの踏査でした。

積雪は1メートルほど、吹き溜まりは2メートルぐらいありましたが雪は締まっており、ラッセルは苦にはならない。私は、初めて60リッターのザックを背負いました。林間からヒガラがさえざり「ガンバレ、ガンバレ」と私を励ましてくれているかのようでした。昼食と休憩を挟んで分水嶺上に着いたのは13時40分。8.5キロ的林道を、4時間と順調に進みました。重いザックがやっと身についたようです。分水嶺への峠からP683までの登りはかなりきつくやせ尾根のピークを2つ乗り越えて1時間50分かけて三角点のある美しい名前の清風山に15時30分に着きました。早いペースについていくことができ「2日間でやれるかも」と期待が高まる。清風山から南下し15時45分、コルでテントを張りました。



夕食は豪華にラムシャブとワインで乾杯！やっと1日の緊張を解き20時、早くも深い眠りにつきました

20日、4時半起床。7時に出発、暖気が入って、先頭に行く植田さんは何度も雪を踏み抜き、苦勞して進みました。P743とP832付近は、支尾根がいくつも派生していて、どれが分水嶺か分からず、鈴木さん、長谷川さんがGPSと地図で確認しながら探すなど、来てみなければ分からない大変さも体験しました。通りすぎて戻ったおかげで、P850.7の三角点の標柱を植田さんが発見するという楽しさも。穂別川本流に落ちる稜線上をひたすら南下し、P656から西に向かって三角点のあるP622.7を15時25分に通過しました。テント場を探して風のあたらないくぼみにテントを張る。8時間の踏査でした。分水



嶺上の林は、風がゴウゴウとうなっていました。私たちのテントは風も当たらず快適でした。この日も快眠！下界ではなかなか寝付かれないのですが爆睡?!していたようです。

21日、5時過ぎまで眠って、出発は7時45分でした。この日の分水嶺もわかりづらくとても苦勞しました。P574からP478にいたるまで2時間半近くかかって10時40分到着しました。力強く進む鈴木さん、植田さんに遅れまいと付いて行く私。その後に長谷川さんがサポートしてくれました。P500まであとわずかです。急斜面を自分を励ましなが進む。すでに着いていた鈴木さん、植田さんが握手で迎えてくれました。11時30分長い長い分水嶺踏査の最後の地点です。

よくぞここまで重いザックを背負って歩けたものと胸にこみ上げてきて涙があふれました。「よかった！非力な私がよくぞ歩けた」。3人に感謝の気持ちでいっぱいです。私にとっての分水嶺踏査は、山登りの楽しさや、苦しさ、未知の世界への冒険を教えてくださいました。

急斜面では、頭から突っ込んだり、踏み抜いたりとおバニングもありましたが、13時10分無事に下山しました。ひとつひとつの体験が、私にはとてもかけがえのない財産になりました。

# 北海道高山植物盗掘防止ネットワーク全道集会在開かれました

2月13日にネットワーク集会在エルプラザで開かれました。エコ島牧の吉沢隆さんと、アポイ岳ファンクラブの水野洋一さんと田中正人さん、ユウパニコザクラの会から水尾君尾さんが現状報告をしました。

吉沢さんは大平山について、花の多いハイライトの場所の道路の付け替えを北海学園大学の佐藤謙先生にも見ていただき行い、付け替えた。しかし第3ピークのところを付け替えたが、非常に貴重種が多いところで再検討していただきたい。今年、道路が登山口まで開通する。道々島牧ピリカ線で、大平山登山専用の何百億円もかかった道路。大平山の自然を残して行くには、ある程度の秩序ある登山、ガイドつきのみの登山を検討していただいているのだが、官庁が乗り気ではないようだ。パトロール体制も大きな問題であり、是非、多くの皆さんにご協力をお願いしたいと語りました。



野さんが、ヒダカヤクの激減をなんとか再生したいと、再生委員会を発足させることを報告しました。高山植物に影響を与えているハイマツを切ったりを行政や関係機関に呼びかけたいと話しました。

ユウパニコザクラの会の水尾さんは、夕張岳におけるロープの撤去について説明。空知支庁がしてくれた危険防止ロープもとって木柵にされた。せつかくユウパニコザクラも増えてきていたのに昨年、全てがはずされた。地元で文化財を守るために官民一体で作ったものです。夕張岳の状況を一緒に考えてもらいたいと報告しました。

梅沢俊さんの「北海道の山と花あれこれ」と題するスライドを使った講演が好評でした。その地でしか生えない高山植物が、あちこちの山に持ち込まれているのは問題だと語り、天塩岳や、樽前山、羊蹄山にコマクサがあったり、徳瞬瞥にフランスギクが咲いていたり、十勝岳でセイヨウタンポポが咲いていたり、帰化植物が高山植物に取って代わっている状況を知って欲しい。

ストックの植生への影響も大きい。使うなら、下りで使って欲しい。オニグルミは5月の花だが、これを写したのは10月の終わりごろ。地球の温暖化に関係があるのでは？ こういう悲しい現象も知ってもらいたい。等など。たくさんの写真を使って、各地の山の現状をお話してくださいました。

過度期を迎えたネットワークの活動、今後は山のトイレを考える会や、山の道を考える会など、他の山の自然を考える会との連携が必要だと思います。

アポイ岳についてはファンクラブの田中さんが、登山道崩壊が進んでいるため、土砂を抑えるために階段、状にするなどの努力をしていること、さまざまな取り組みを紹介。同じくファンクラブの水



## 北海道の山のトイレを考える会も報告

1月22日、東京・港区の航空会館で山の水場・環境報告フォーラムが開かれ、山のトイレを考える会や、自然保護団体、勤労者山岳

## 山の水場・環境報告フォーラム

連盟、県連の山岳連盟など8団体60人が山の水場調査の結果報告と今後の課題について話し合いました。テレビ朝日のディレクタ

1月22日、東京・港区の航空会館で山の水場・環境報告フォーラムが開かれ、山のトイレを考える会や、自然保護団体、勤労者山岳

## 「Ray (レイ)」 アメリカ テイラー・ハックフォード監督

ソウルの神様と呼ばれ愛された黒人歌手レイ・チャールズの光と影を丹念に描き、昨年6月に73歳の生涯を遂げたレイの追悼作品になりました。

ジョージア州の貧しい母子家庭に生まれ育ち、幼いときに、目の前で、洗濯おけに落ちて死んだ弟のことがトラウマになり、7歳で自身も失明する中で「目がみえないからと甘えてはならない、自分の足で立て」と厳しくも優しい愛を注がれて育ったレイは、素晴らしい音感の持ち主でした。



レイ (ジェイミー・フォックス) は、歌う

17歳で、故郷を後にして、盲目のハンディで、人にだまされたりもしながら、ピアノ演奏と共に、独自の歌の創作に打ち込みます。黒人差別のある会場での演奏を拒否し、故郷のジョージア州から、永久追放を宣告されますが、公民権運動に参加する人でもありました。次々と生み出される音楽が素晴らしく、まるで、コンサートに参加しているような楽しさを味わいました。当時、その音楽がどれほど斬新であり、敬虔なクリスチャンからは非難も受けるなどからも、理解できません。レイの人間性に深く共感して結ばれた最愛の妻がありながら、バックコーラスの女性を次々と愛人にしたり、麻薬に溺れて、ついに刑務所に入ったレイの影の部分も

麻薬に溺れて、ついに刑務所に入ったレイの影の部分も

赤裸々に描き、映像に深みが加わりました。そこから立ち直ったレイが素晴らしい。レイの歌は彼の人生そのものでした。映画で描かれる彼の欠点や失敗も、レイ自身が包み隠すことのないようにと生前望んだと言います。レイを演じたジェイミー・フォックスの演奏場面は圧巻。まるで本人のようでした。

まさにソウルとは、魂を揺さぶる音楽ですね。彼を追放したジョージア州は、後年レイに謝罪し、「我が心のジョージア」を州歌にしますがラストの流れるこの名曲が素晴らしかったです。

## 「故郷の香り」 中国 フォ・ジェンチ監督

美しい山村の風景とほのかな初恋の思い出とつらい現実とが交互に描かれます。監督は「山の郵便配達」で、詩的で素晴らしい風景と心模様を描いた人です。

北京の役所に勤めるジンハー (グオ・シャオドン) は10年ぶりに故郷に戻り初恋の人ヌアン (リー・ジア) と再会します。ヌアンは、聾啞のヤーバ (香川照之) と結婚していて、可愛い娘もいました。都会の大学に進んだジンハーと故郷に残ったヌアン。ふとした行き違いから、別れてしまった二人の美しい過去と、つらい現実とが混ざり合って、青春の苦さが胸を突きます。10年とはやはり短いようで、人生を変えるほどの時間だと思ひ知らされます。

揺れ動く男女の心模様を、日本の原風景のような山村での日常生活をゆっくりと細やかに描き出して、故郷の香り、人のぬくもりを伝えて懐かしくなりました。誰にでもある青春のほろ苦さと甘酸っぱい香りにつかったひとときでした。

香川照之の演技に深みがあり、北京に帰るジンハーに「付いて行け」とヌアンを促すシーンに、愛の深さに思わず涙しました。



## 「運命を分けたザイル」 イギリス ケヴィン・マクドナルド監督

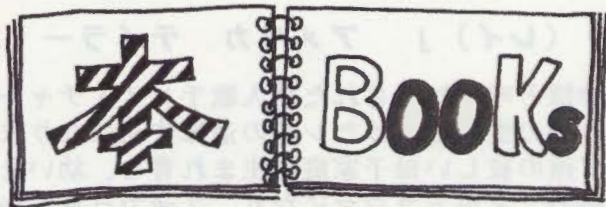
1985年、アンデス山脈の前人未踏の壁に挑んだ二人のイギリス人登山家の物語です。

登頂に成功したものの、下山途中に一人が滑落、骨折。体感温度マイナス60度、わずかな可能性を信じて救出を試みるが、怪我をしたジョーは、標高6400メートルの氷壁で宙吊りに。サイモンは、このままでは二人とも死ぬと、ザイルを切るのです。

実際の事故現場で撮影されたドキュメンタリータッチで描かれ、極限のなかで、生きることをあきらめなかった二人の姿を臨場感あふれるスクリーンに圧倒されました。会場は波をうったような緊張感で、身じろぎできないほど。私は、後日、うたたねをしていた時、その時の自分がそのクレバスに落ちたかのような錯覚にとらわれ金縛りになりました。

あらゆる知恵と、葛藤。「生きたい」と粘り抜く努力が胸を打ちます。

「チャーホフとの恋」  
 リディア・アヴィーロワ著  
 ワルワラ／ブブノア絵  
 小野俊一訳 小野有五解説  
 未知谷出版 2000円



この本は三人の子どもの母であり、妻であったリディアがチャーホフとのプラトニックな10年の恋を手紙と回想とで綴った本です。

小野有五さんの父、小野俊一さんが訳した「チャーホフの恋」は絶版になっていたのですが不思議な縁で53年後に発刊する運びとなりました。名訳がブブノワさんの挿絵と共に甦りました。

チャーホフの恋愛感は当時としてはかなり新しかったように思います。どの女性とも、情熱の赴くままにひとつになろうとする恋愛とは正反対に、近づけば近づくほど逆に相手から離れようとしたようです。解説で小野有五さんは、チャーホフにとってはたとえ経済的なあるいは社会的な平等が確立されたとしても、それは解決するような問題とは思えなかったであろう。人間は本来そのような自立した存在でも永続権をもつものではないからであるとしています。

ひたむきにチャーホフに恋し続けたリディアの気持が痛々しいほどですが、チャーホフもまた彼女に惹かれていたのだと思います。

戯曲の中に、彼女への想いを託したり気持の表し方が複雑で、まるで小説の世界のようでした。

チャーホフに惹かれた小野俊一さんは、動物学者でありながら、社会から目をそむけることができずに、社会運動や、政治運動、文学の翻訳といった何足ものわらじを履き続けた人であり、チャーホフもまた、実人生では、医者として、またさまざまな文化活動にエネルギーを費やした。それが健康を蝕んだことも共通していると、息子の小野有五さんは解説しています。

小野有五さんの市民運動への多方面での活躍を見ていると、まさしく父俊一さんと同じ生き方をしていることに、驚きと感動を覚えました。

「言葉の力、生きる力」 柳田 邦男著 新潮社 1500円

胸に刻み込まれた言葉が、絶望を希望に変える、そんな日本語が持つ豊穡な力と煌めきを呼び覚ますエッセイです。

著者が紹介している写真家、星野道夫の写真と文章は私もとて惹かれます。北極探険史の人々や、はるか昔、ベーリング海を渡って移動していったエスキモーや、インディアンのことなどに思いをはせて「その切れ目のつながりの果てに、今、自分がアラスカで呼吸している。誰もいない原野で、森で、川や谷で、その気配を感じることができるといふ気がした。ずっと続いている歴史を思うとは、本当はそういうことなのだろう。」との表現の中に、星野道夫の時空の感じ方が見事に表現されています。

著者は、息子を自死という形で喪う悲しみを体験していますが、「私の心には自分の境遇を幸福か不幸かという次元で色分けする観念も意識もない。あるのは、内面の成熟か未熟かという意識だ。そして、内面において様々な未成熟な部分があったとしても、あせることなく、人生の終点に到達する頃に、少しでも成熟度をましていけばよしとしよう」と。私もこんな風に生きていけたらと思いました。



「恋問川」 菅原 みえ子著 かりん舎 1500円

誰の胸のうちにも、忘れ得ぬ川が存在します。私にとっての沙流川のように。菅原みえ子さんの素敵な詩集が発刊されました。

恋問川は、根室に流れる実在の川です。コエトイとはアイヌ語で激しく流れて波を壊すという意味があるそうです。著者の情念が恋問川に象徴されているかのようです。たくさんの死をみつめてきた恋問川からあなたの想像力を膨らませてもらえたらと思います。小林重予さんの挿画も素敵です。

「武器なき祈り」 板垣真理子著 三五館 1、680円

70年代から、アフロビートという新スタイルの音楽を世界中に普及させた、ナイジェリアの歌手、サクソ奏者フェラ・クティはアフリカ人の自由と平和、人権を守る活動家でもありました。

著者は写真家であると共に、エッセイストであり、夢にまで登場した、フェラ自身のことばによる、波乱に満ちた活動を生き生きと伝えています。

60年代後半に渡米、マルコムXなどの黒人運動に触発されたフェラは、ナイジェリアに帰国後、反政府行動により、牢獄に何度も入れられながらも、たくさんの作品を発表し続けたのです。植民地政策がアフリカに及ぼした悪影響、ヨルバの人々が人々が信ずる神々、一夫多妻制など、フェラを立体的にとらえるための社会的背景も詳しくわかりやすい。

フェラが熱く生き、闘ったことが伝わってきました。著者は「もし世界中の人々が本気で平和を望んだのなら、本気でそれを祈ることが出来る日がきたら、世界は変わる。それは現実の闘いの放棄ではけっしてない。」とフェラの想いを伝えています。音楽に詳しくはない私ですが、フェラのメッセージがこめられたCDを聴きたくなりました。



「いただきますからはじめよう」みんなの食育講座

毎日新聞北海道支社報道部編 寿郎社 1200円



本書は毎日新聞の記者をはじめ、北海道庁の担当者、小学校の管理栄養士、市民の立場で食に関心を持って活動する人たちとの共同作業で生まれました。内容は食についての現状、食育をめぐる北海道内をはじめとした各地の取り組み、食育の重要性を説く著名人へのインタビューと講演記録、そして今日からでも始められる食育のてびきで構成されています。

興部町の「地元のための食育、地元のための牛乳」の取り組みがすてきです。私は牛乳が飲めません。でもこんな生産者の顔が見える牛乳だったら飲んでみたいです。この町の子どもたちはとても幸せだと思います。キレル、むかつくといったことが食と密接に関わっていることも明らかにされていて、改めて、食は心も育てることなんだと気づかされます。

享月 日 発行 月刊 2005年(平成17年)3月6日

私も70年代の  
山は忍耐の学校だ  
した。70年代は重たい  
です。あきらめに登り続  
けているうちに弱音を吐  
かなくなりました。有名な  
三浦雄一郎さんの登山  
努力の裏にエベレスト登  
りにと、70年代の登山  
精神が感じられます。(4)

未来を生きる君へ

三浦雄一郎さんの伝言

「若いときの苦労は買ってでもしろ」。そんな噂とどうにか、いい伝言が私たちの若い頃にはあった。70歳でエベレストへ登りながら、やはり昔の人はいいことをいつてくれたと思つた。

山は忍耐の学校だ

若い頃、重荷の下で登り続けながら、「オレはここへ行くのだ」と思い返したものだ。あの頃はあてのない人生の霧の中をさまよっていた。26歳で国立大 学助手、将来は教授。そのコースを自分で捨て、もう一度スキーでオリンピックに賭けようと思つた。

見えていたエリートコースの特等席を捨て、どこへ行くとも知れず、あてのない人生。重荷をしまいい込んでしまったと気づいても、もう戻れない旅に出ってしまったのだ。

日本アルプスの立山の強力がちのように、強くなれたらと思つた。3年あまりの強力の仕事で、1000m近くの荷物をかっいで歩けるようになった。重荷にこらえて登り続けることは、その荷物を下ろした時、体にハネが生えたようにごままれ、山々を走りまわることだと分かった。それから走りまわった。立山、剣、さらには穂高や槍ヶ岳。荷物をかっいで、歩いて登って走ってこんだ。

人間の体にしみ込んだ記憶は

いつまでも消えないものだ。65歳になった時、あきらめかけていた人生晩年の暗がりの中から、世界の頂上「エベレスト」を目標に決心をした。それは、気が遠くなるほど高く遠い夢だった。初心に帰った。もう一度山の初心者に戻り、足に1kg、背に5kgのザックをつけて歩きはじめた。少しずつ重量を増やし、3年かけて足10kg、背30kgのザックで歩けるようになった。

若い頃、世界一を夢見ながら登り続けた記憶がよみがえってきた。本当に小さくても、わずかでもいいから、あきらめず、一歩ずつ登り続けること……。

重荷に耐えながら、あきらめずに一歩ずつ。そうすればいつか夢の頂上にとどりつける。エベレスト山頂を目指した時も、そう思いながら登り続けた。

山は忍耐の学校である。人生は山登りと似ている。(プロスキーヤー)

## お便り

通信届けていただいております。今年もよろしくお願ひします。自然情報を楽しみにして  
います。私は江別でスキークラブを作って地域の方々に冬のたのしさを共有することなど  
をやっています。

11日も森林公園でふくろうツアーをしたらふくろうさんに出会うことができうれしくなりました。今回のインタビューの一乗寺の活動は北海道空知民衆史の朱鞠内湖の取り組みを10年以上前から知っていて寺の立替の時や韓国への遺骨を持っていく時のカンパ活動に参加していました。また韓国平和ツアーで日本が韓国でしたことをきちんを歴史的財産として保存し子供たちに伝える教育がなされていることに日本人の私は本当に何も知らされていない自分を恥ずかしく思いました。でもきずなは国境を越えて草の根から発展していることを今回の記事でわかり共同作業にまで発展していつていることに感動と粘り強い活動に学ばされましたので報告します。

(江別市・但馬桂子さん)

銀河通信で、拙書(素晴らしき幸運な登攀)を紹介していただきお礼申しあげます。銀河通信に出ています梅沢俊君は、中国のミニヤコンガ偵察や、プータン登山で一緒でした。また後藤言行さんは小樽商業高校で一緒の勤務でしたし、私たちが管理する中山小屋のランプの下で酒を酌み交わした懐かしい方々です。

拙書は昨年末に完売となりましたが各書店から、追加注文が相次ぎ、やむなく増刷に踏み切りました。書店に並びますので応援いただければ幸いです。

(札幌市・京極絃一)

長女の私は、87歳の母を介護していました。ある日の午後、母は身支度を整え長椅子で休んでいましたが、私が用足しから戻ると、母は急逝していたのです。肉親に電話してもつながらず、親しい友人二人が駆けつけてくれました。母は帰らぬ人となりましたが、この日、この時の助けのなんと心強かった事、血縁よりも縁あって結ぶ「結縁」を思い知らされました。今振り返って思うことは、自分が常に前向きの姿勢で素直に生き、何にでも関心を持っていると日々の生活に発見が多く、自分に必要なものが見えてくるということです。オンリーワンの星々の人と静かに輝いていけるのなら、愉しきかな我が人生と言えるのではないのでしょうか。これからも「私の宝」のごとき人々と共に……

(札幌市・さかい広さん)

みな子さんの活躍、通信にあふれていてとても楽しくなります。(石狩市・皆川義隆さん)

書き続けることはパワーのいることだと改めて思います。これだけの紙面を一気に読ませてしまうみな子さんのパワーのどでかさを感じます。

(福島市・阿部一子さん)

北海道の山関係者の熱心な取り組みには頭が下がる思いです。新妻さんには、昨年、上高地で少し話をさせていただきました。またどこかで、話をする機会があればと思います。通信の本紹介参考になりました。

(東京都・日本トイレ協会。NPO山のECHO 上 幸雄さん)

## 購読料をありがとう

2005.1.10～3.25

新井喜美子(北広島市) 高橋菜津子(札幌市) 三野裕輝(札幌市) 藤重千秋(斜里町)  
片山篤子(札幌市) 京極絃一(札幌市) 住田真樹子(様似町) 但馬桂子(江別市) 河村健(札幌市) 大友芳博(札幌市) 篠崎仁(鎌ヶ谷市) 澤田正(東京・中央区) 江本嘉伸(東京・新宿区) 角田慶子(札幌市) 阿部一子(福島市) 中村秀子(千歳市) 竹内俊夫(札幌市) 上幸雄(東京・港区) 笹林陽子(山形市) 大久保フヨ(北広島市) 皆川義隆(石狩市) 水野隆夫(今帰仁村) 菊池和美(札幌市) 加藤多一(長沼町)

12号分の方、5年分の方、カンパなど含めて91,000円は、印刷、送料に使わせていただきます。

ありがとうございます。